

春燈

2017 March

3
月号



主宰の句

安立公彦

寄り添うて彩り美しき冬薔薇

短日の回廊すでに灯を点す

黒髪の項やさやに羽子板市

久に仰ぐふるさとの山初明り

めでたさの黄のふくよかに福寿草



牡丹への偏愛のほどは咎むるな

『柿の木坂雑唱』昭和四十九年

『安住敦全句集』を繙くと牡丹を詠んだ句が八十九あり、先生の牡丹へ籠める愛情の深さがわかる。しかしこの句の「偏愛のほどは咎むるな」は、心象を大事にする、先生の作風からでも特別強烈だ。〈牡丹に問ふほかに誰にか愛されし〉のような牡丹偏愛の句もある。

安住先生は若いころ新興俳句の作家であり、その時代の詩想が昇華して牡丹に耽溺して止まないのであろう。

吉川 隆

安住敦の句

あたたか枯れてゐるなり芙蓉の実

『暦日抄』昭和三十五年

「久保田先生、赤坂禪寺町に移る」の前書がある。新しい家に落ち着かれた師に、ほっとさせられている敦先生の安堵の思いが伝わってくる。

「万太郎の春燈」を守るために、経営者編集の責任者であると共に、細やかに師の身辺の雑事にも、手を尽くされた敦先生。どの御句にも、しみじみとした、やさしさ、あたたかさが感じられ、心引かれるのである。

西岡啓子

燈下集



○ 岩永はるみ

鳥群るる運河に冬日濃かりけり(野田四句)

凍晴や旧家に待する大櫓

暮残る蔵の白壁実千両

小春風ひしほの町の過客なる

寒禽の声聞き分くや師の墓前(櫻桃子先生十三回忌)

○ 林 紀 夫

大洋に著き航跡大巨(祝春暁・洋さん)

微笑みが黄泉に満つるや初明り(祝春暁・ハルエさん)

十二月八日我は一歳十ヶ月

風冴ゆや大山三山縦走す

来る年の良きこと願ひ札納

○ 割 田 容 子

ケアハウスお国自慢の雑煮焼

冬野菜のメニュー豊かやケアハウス

マニキュアのピンク鮮やか老婦人

枯木道シベリアンハスキー連れし女

新春や少女の放つアーチェリー

○ 白 杵 游 児

記すべきことある幸や日記買ふ

新玉の年や天下の険の湯のけむり

乗初め定時違へぬ新幹線

不器用に太箸使ふ老夫婦

神の恋いとおほらかや初神楽

○ 小泉 貴弘

茶の花や垣根越しなる長話

初雪を背にのせぬ風見鶏

風花の睫毛に触るる甲斐路かな

白息や北海道のど真ん中

凍空や微笑絶やさぬ観世音

○ 中野 さき江

笹鳴や僧坊に踏む青畳

西の市一筋裏の路地に福

青春のぼつかり枯野と化しにけり

ひと筋と言へるがんこや紺の足袋

頼るものなくて仰ぐや冬銀河

○ 成田 なな女

年の暮アレンジフラワー届きけり

山茶花の散り初めにける垣根かな

山茶花のうぐひす寄せてゐたりけり

冬至とふ南瓜ぜんざい頂きぬ

南天の赤き実たわわとなりけり

○ 栗原 完爾

新海苔や薄墨にほふ忌明文

鷹放ち漢は黙を深くせり

捨てられぬ父の行李や開戦日

冬の日やあををあを立てる孔子像

原発の是非論ずわい蟹真つ赤

○ 小菅 礼子

思ひ出の師のやさしさや柚は黄に

手間ひま掛くる楽しき刻や柚ジャム煮

師を偲ぶ楽しき句会去年今年

閃きなき風吹き渡る花八手

白鳥の便り聞く夜の静寂かな

○ 生田 高子

大吟醸「越路吹雪」を年賀とす

巻織汁鍋ごと届く厨口

名跡の復活のあり初芝居

かいつぶり夕波高くなりけり

佗助の一輪開き初めにけり

○ 本多遊方

数へ日の靴下に穴開いてをり

鐘の音が疎まるとは除夜の闇

ことしこそ今年こそはと去年今年

初日さすソーラーパネル増えにけり

墓じまひされし跡地に初日さす

○ 武田巨子

蟪蛄の羽閉ぢぬまま枯れ尽くす

星満ちてピカソの青の聖夜かな

神体山登拝口の淑気かな

佇立てて雑踏にゐる二日かな

冬萌の濠の中までおよびけり

○ 諸岡孝子

あやとりの箒小さき雪催

花しづくその名も美しき葛湯とく

香皿を洗ひて伏せて七日かな

探梅やはぐれしこともまた榮し

松過ぎのときにさびしきうどんかな

○ 小泉三枝

茶の花や白寿の母のよく笑ふ

五箇山の屋根引き締まる霜の朝

やどり木のいよ丸まる十二月

クリスマス万の灯すくふ観覧車

星一つ泣いて出でくる聖夜劇

○ 平野加代子

松葉杖の夏々渉る去年今年

亡き夫の笑顔よぎるや初鏡

サプリメントの七彩光る三日かな

初旅や電子書籍を荷に入れて

齋打つバッハのカノン響かせて

○ 田嶋洋子

雪吊に天守の影の移りけり

空青し競ひて伸ぶる枯木立

賀状書く父の代筆せし日はも

皆勤の晩年講座冬帽子

マフラーや心の鍵と家の鍵

春燈賞（抄） 25句自選

齋藤晴夫

白粥の命の香り冬はじめ

新しき星座描かむ星冴ゆる

過ぎ越しし時を温めて日向ぼこ

どんど焼筐底の文供とせり

寒北斗仰ぎて遠し閑子の忌

わがままな雲を映して水温む

切通しそよ吹く梅の風に逢ふ

散りきらぬ梅の愁ひも実朝忌

鶯の声明に似て時逝きぬ

花の苔空の夕映え明日を待つ

鳥帰る相模大山晴るる日に

北蔭の落花の風趣優りけり

遠富士に雲の羽衣仏生会

いとけなく甘茶の海の童仏

花過ぎて葉桜多く語り出す

爽立てる松や裾濃に五月富士

万国旗そよぐかに風の牡丹園

草笛やむかし兄居て弟も

明易の松濤を聞く旅心

紫陽花の七色の旅終はる頃

この星の命の不思議魂送り

文弱に硯の重さ洗ひけり

牽牛花空の藍より濃かりけり

夏痩せて古淡の風姿ありやなし

潮さびの鳥歌を聞く夏の果

当月集

安立 公彦選



○ 河崎 國代

真青なる初空にかく夢一字

悪戯も今朝は目こぼし初鴉

黙のまま胸三寸に餅焦がす

朝日透かし冬霧晴るる緩き刻

風花の参道に散る光と影

○ 上野 進

櫓を鳴かせ熊野路霧の渡し舟

山茶花の散り敷く気儘掃き寄する

劍豪の末路は哀史小夜時雨

獅子頭担いで去りぬまた空き家

宣長の奥墓濡らす初日差

○ 石橋 邦子

なまはげの零す藁しべ拾ひけり

読初の『ペリリュ島戦記』飢餓地獄

一月や森百年の清正井(明治神宮)

万葉の森に風あり初筑波

初山河終活ノート書き始む

○ 齋藤 晴夫

水の星の水は甘露や初手水

一富士の初夢ついで見ずじまひ

なにもかも夢の彼方へ古暦

数へ日や積ん読本をまた増やし

てのひらにぬくめたきほど冬董

○ 坂入 妙香

手を振つて友の来にけり冬帽子(根津美術館三句)

散り紅葉仏の御手掠めけり

散り紅葉覆ひつくすや水の面

山茶花の咲き継ぐ庭や夫恋し

表参道の煌く樹々やクリスマス

春燈の句

安立 公彦選



子の心あるとき遠き柚子湯かな
鯪鍋吊し切りてふさま知らず

東京 那須 禮子

拵着の花売り娘街師走

山眠り鉄塔ばかり肘張れる

立冬や故郷持たぬ風の音

福島 物江 康平

父労咳埋火ほじる火箸の手

句集の名紙の墓とや開戦日

臍出しの児にまでまでと初笑

初春の雲の白さにとまどへり

神奈川 落合 小枝

目薬を注して初日を迎へけり

一湾の木枯し富士を遠くせり

凍蝶を見つけ男の児の噪ぎすぎ

早朝の銀杏落葉や農学校

冬耕の農夫ゆつくり振向けり

東京 佐藤まさ子

職工の憩ふベンチや冬日差す

時刻む宝飾時計も師走かな

月淡し水仙の香のいづくより

恵まれし日々有難や冬椿

寝られぬ夜や胸に咲く寒椿

雪催ひ生計針もて立てし日や

初風や高く輪を描く鳶の笛

千葉 鶴岡 紀代

水神に供ふ若潮汲みにけり

義士まつり江戸の古地図に本所あり

水鳥を育む春の干潟かな

枯れしものみなきよらかにかろやかに

冬の日の置き忘れたるぬくみかな

神奈川 宮崎 洋

青空が家をみかける年用意

からつぼの空おほとしの灯をともす

初暦「助六由縁江戸桜」

神奈川 犬嶋テル子

門付けの三河万歳見しむかし

余言

安立公彦

積ん読の嵩や漱石百年忌

松橋 利雄

昨年は夏目漱石没後百年の年だった。支芸誌などでは特集も組まれた。大正五年（一九一六）一月九日、漱石夏目金之助は四九歳の生涯を閉じる。現在から見るとまさに早世である。しかしその文学上の業績は計り知れない。

漱石の文学は、その読み継がれる頻度においても、「古典」と称しても良い。さらに小説の中で的人物の会話も、現代の作家の文章と比べ難解さは此方も無い。

作者も漱石の愛読者だろう。「積ん読の嵩」は耳の痛い言葉だ。私なども机辺「積ん読」の書が嵩を為している。この句、「漱石百年忌」が善い。この九音は動かない。

元朝や蒼天を刺す大太鼓

諸戸せつ子

「元朝」という季語は確かだ。言葉としても、「がん」という固い響きに、「ちよう」というきつぱりとした音声か

添う。更に「蒼天を刺す」の中七がよく元朝と呼応する。如何にも元日の朝の気分が感じられる句だ。

「大太鼓」は舞楽、或いは神事を祝うためのものか。新年の弥栄を称揚する思いが充ちている。私たちの生活の中から、新年という感覚が次第に形式的となつて来ている現在、俳句こそ、それを呼び止める短詩型文学である。

羽衣の松風そよぐ淑気かな

木村 傘休

「羽衣松」は実在する。三保松原の御穂神社の南東にある松という。辞書には、能「羽衣」の松とある。

この句はその能の「羽衣」をテーマとした。この能は、「三保松原で白竜という漁夫が羽衣を見つけ、それを返して貰った礼に、天人が舞を舞つて昇天する」というもの。この句も如何にも新春らしい一景である。「淑気」をよく活かしている。尚、白竜を辞書に当たると、「白色の竜、天帝の使者」とある。能の白竜はそれを踏まえている。

息白く傘寿の一步踏みしむる

卜部 黎子

傘寿は八〇歳。誰しもこの年になると、或る種、諦念の思いが先行しよう。そしてつい後ろを振り返る。それが飾らない人間の本性というもの。さらにわが身に過ぎた傘寿は差し置いて、人の傘寿に思いを馳せるのも同様。しかし

また、そういう自身を顧みて、再生の意気を新たにすることも、傘寿の思いの一つと言えよう。

この句、そういうことは別として、「傘寿の一步踏みしむる」がみごとだ。作者の意気に賛同する。いい句だ。

真白なタオルをおろすクリスマス 三宅 文子

クリスマスと言えば思い出すのは、〈降誕祭町にふる雪わが家にも〉という安住先生の句だ。昭和二年四〇歳の時の句。当時の降誕祭は、今に比べると静かなものだったろう。今は街中に聖樹が点り、往き来の人々の姿も華やいで見えるが、祭り化して、「わが家にも」の深みはない。

掲出句、何と言つても、「真白なタオルをおろす」が善い。若し作者がクリスマスチャンであれば、その敬虔な思いが表現され、そうでなくとも、この日常の此事とも言うべき所作とクリスマスとの取合せはみごとなものである。

子を抱いて入る幸せ冬至風呂 (叢) 中嶋 昌子

この「子」はお孫さんだろう。どの親も祖父母となると孫への愛着は深まる。その孫を抱いて入浴している作者「冬至風呂」が「幸せ」をひとしおとする。投句用紙を見ると出句の日付は一月三日とある。

作者は一月八日の新年会にも元氣な姿を見せた。それが

一月二日に急逝、の報を受ける。死因は心筋梗塞と聞く。全く思い掛けないことだった。一九日の通夜に参る。傘休、玲子、みどり、秋草子、水明、喜美代、和子、記子の皆さんの出席があった。丁度選句の時だったので、掲出の句を用紙に書き、通夜の席でこ子息に渡した。房洋句会の皆さんが短冊に悼句を染筆し、法事の終りに読み上げられた。真言宗の僧侶による。落ちついたお通夜だった。今はただご冥福を祈るばかりだ。

枯葉にも好みの風のありにけり 赤岡 茂子

『日本大歳時記』の飯田龍太著「枯葉」の解説に、「雑木でも檜や樺などはいさぎよく散るが、柏など、霜に打たれてすっきり枯れ色となつても、未練たらしくいつまでも梢についている」という一節がある。近所にそういう一木があり、目にするたびに、この解説を思い出す。全くその通り。自然を見る目の確かな人は出色の句を遺す。

掲出句。「好みの風」が意表を突いている。しかし自然を見る目はしっかりしている。この句を見てみると、「枯葉」という自然現象を、あたかも生あるものの如く詠んでいるのに気付く。同時発表の、〈吹かれ来て山門叩く朴落葉〉についても同じことが言える。一句に枯葉や落葉に対する思いやりの心がこめられている。